

中国怪奇小説集

子不語

岡本綺堂

青空文庫

第十四の男は語る。

「わたくしは随園戯編と題する『子不語』についてお話し申します。

この作者は清の袁枚しん えんばいで、字を子才しさいといい、号を簡齋かんさいといいまして、錢塘せんとうの人、乾隆けんりゆう年間の進士しんしで、各地方の知県をつとめて評判のよかった人でありますが、年四十にして官途を辞し、江寧こうねいの小倉山下に山荘を作つて小倉山房しょうそうさんぼうといい、その庭園を随園と名づけましたので、世の人は随園先生と呼んで居りました。彼は詩文の大家で、種々の著作もあり、詩人としては乾隆四家の一人に数えられて居ります。

子不語の名は『子は怪力乱神を語らず』から出ていること勿論でありませんが、後にそれと同名の書のあることを発見したというので、さらに『新齊諧』と改題しましたが、やはり普通には『子不語』の名をもって知られて居ります。なにしろ正編続編をあわせて三十四巻、一千十六種の説話を蒐集してあるという大作ですから、これから申し上げるのは、単にその片鱗に過ぎないものと御承知ください」

老嫗の妖

清の乾隆二十年、都で小児が生まれると、

驚風

(脳膜炎)

にかかつてたちまち死亡するのが多かつた。伝えるところによると、小児が病いにかかる時、一羽のきゆうりゆう鶴——一種のけちよう怪鳥で、形は鷹のごとく、よく人語をなすということである。——のような黒い鳥影がともしびの下を飛びめぐる。その飛ぶこといよいよ疾はやければ、小児の苦しみあえぐ声がいよいよ急になる。小児の息が絶えれば、黒い鳥影も消えてしまうというのであつた。

そのうちに或る家の小児もまた同じ驚風にかかつて苦しみ始めたが、その父の知人にかく鄂某というのがあつた。かれは宮中の侍衛を勤める武人で、ふだんから勇氣があるので、それを聞いて大いに怒つた。

「怪しからぬ化け物め。おれが退治してくれる」

鄂は弓矢をとつて待ちかまえていて、黒い鳥がともしびに近く舞つて来るところを^{はた}礎と射ると、鳥は怪しい声を立てて飛び去つたが、そのあとには血のしずくが流れていた。それをどこまでも追つてゆくと、大司馬^{たいしば}の役を勤める李氏^りの邸に入り、台所の竈^{かまど}の下へ行つて消えたように思われたので、鄂はふたたび矢をつがえようとするところへ、邸内の者もおどろいて駈け付けた。主人の李公は鄂と姻戚の関係があるので、これも驚いて奥から出て来た。鄂が怪鳥を射たという話を聞いて、李公も不思議に思った。

「では、すぐに竈の下をあらためてみる」

人びとが打ち寄つて竈のあたりを検査すると、そのそばの小屋に緑の眼をひからせた老女^{たお}が仆れていた。

老女は猿のような形で、その腰には矢が立っていた。しかし彼女は未見の人ではなく、李公が曾かつて雲南うんなんに在ったときに雇入れた奉公人であつた。雲南地方の山地には苗びょうまたは※ようという一種の蛮族が棲んでいるが、老女もその一人で、老年でありながら能く働かつき、且は正直律義りちぎの人間であるので、李公が都へ帰るときに家族と共に伴い来たつたものである。それが今やこの怪異をみせたので、李氏の一家は又おどろかさされた。老女は矢傷に苦しみながらも、まだ生きていた。

だんだん考えてみると、彼女に怪しい点がないでもない。よほどの老年とみえながら、からだは甚だすこやかである。蛮地の生まれとはいいながら、自分の歳を知らないという。殊ことに今夜のよ

うな事件が しゅったい 出来したので、主人も今更のようにそれを怪しんだ。あるいは妖怪が姿を変じているのではないかと疑つて、嚴重にかの女を ごうもん 拷問すると、老女は苦しい息のもとで答えた。

「わたくしは一種の じゆもん 呪文を知つていまして、それを念じると能く異鳥に化けることが出来ますので、夜のふけるのを待つて飛び出して、すでに数百人の子供の脳を食いました」

李公は大いに怒つて、すぐにかの女をくくりあげ、薪を積んで生きながら や 焚いてしまった。その以来、都に驚風を病む小児が絶えた。

らせつちよう
羅刹鳥

これも鳥の妖である。清の雍正年間、内城の某家で息子のために媳を娶ることになった。新婦の里方も大家で、沙河門外に住んでいた。

新婦は轎に乗せられ、供の者大勢は馬上でその前後を囲んで練り出して来る途中、一つの古い墓の前を通ると、俄かに旋風のような風が墓のあいだから吹き出して、新婦の轎のまわりを幾たびかめぐったので、おびただし沙は眼口を打って大勢もすこぶる辟易したが、やがてその風も鎮まつて、無事に婿の家へ行き着いた。

轎はおろされて、介添えの女がすだれをかかげてかの新婦を連

れ出すと、思いきや轎の内には又ひとりの女が坐っていた。それは年頃も顔かたちも風俗も、新婦と寸分ちがわなない女で、みずから轎を出て来て、新婦と肩をならべて立った。それには人びとも驚かされたが、女は二人ながら口をそろえて、自分が今夜の花嫁であるという。その声音こわねまでが同じであるので、婿の家も供の者も、どちらが真ほんもの者であるか偽にせもの者であるかを鑑別することが出来なくなつた。さりとて今夜の婚儀を中止するわけにも行かなかつたと見えて、ともかくも婿ひとりに媳よめふたりという不思議な婚禮を済ませて、奉公人どもはめいめいの寢床へ退がつた。

舅しゅうとも自分の室へやへはいつて枕に就いた。

それから間もなく、新夫婦の寢間からけたたましい叫び声が洩

れきこえたので、舅は勿論、家内一同がおどろいて駈け付けると、婿は寢床の外に倒れ、ひとりの媳は床の上に倒れ、あたりにはなま血が淋漓りんりとしてしたたっているので、人びとは又もや驚かされた。

それにしても他のひとりの媳はどうしたかと思まわすと、梁はりの上に一羽の大きい怪鳥けちようが止まっていた。鳥は灰黒色の羽はねを持っていて、口喙くちばしは鈎かぎのように曲がっていた。殊に目立つのはその大きい爪で、さながら雪のように白く光っていた。ひとりの女の正体がこれであるのは誰にも想像されることであるから、大勢は騒ぎ立てて捕えようとしたが、短い武器では高い梁の上までとどかないので、さらに弓矢や長い矛ほこを持ち出して追い立てると、怪

鳥は青い燐おにびのような眼をひからせ、大きい翅つばさをはたはたと鳴らして飛びめぐった末に、門を破つて逃げ去つた。

そこで、倒れている婿と媳とを介抱して、事の子細を問いただすと、婿は血の流れる眼をおさえながら言つた。

「寢間へはいつたものの、媳ふたりではどうすることも出来ないので、しばらく黙つてむかい合つているうちに、左側にいた女がたちまちに袖をあげてわたしの顔を払つたかと思うと、両の眼玉は抉くり取られてしまった。その痛みの劇はげしさに悶絶して、その後のことはなんにも知らない」

媳はまた言つた。

「わたしは婿殿の悲鳴におどろいて、どうしたのかと思つて覗こ

うとすると、その顔を不意に払われて倒れてしまいました」

彼女も両眼を抉り取られているのであった。それでも二人とも命に別条がなかったのが嘆きのうちの喜びで、婿も媳も厚い手当てを加えられて数月の後に健康の人となった。そうして、盲目同士の夫婦はむつまじく暮らした。

怪鳥の正体はわからない。伝うるところによると、墓場などのあいだに太陰積尸たいいんせきしの気が久しく凝るときは化けして羅刹鳥らせつちようとなり、好んで人の眼を食らうというのである。

平陽の令

平陽へいようの令れいを勤めていた朱鑠しゆれきという人は、その性質甚だ残忍で、罪人を苦しめるために特に厚い首枷くびかせや太い棒を作らせたという位である。殊に婦女の罪案については嚴酷をきわめ、そのうちでも妓女ぎじよに対しては一糸を着けざる赤裸あかはだかにして、その身体からだじゆうを容赦なく打ち据えるばかりか、顔の美しい者ほどその刑罰を重くして、その髪の毛をくりくり坊主に剃そり落すこともあり、甚だしきは小刀をもつて鼻の孔をえぐつたりすることもあつた。「こうして世の道楽者を戒いましめるのである。美人の美を失わしむれば、自然に妓女などというものは亡びてしまうことになる。しかも色を見て動かざる鉄石心を有した者でなければ、容易にそれを実行することは出来ない」と、彼は常に人に誇っていた。

そのうちに任期が満ちて、彼は山東さんとうの別駕べつがに移されたので、家族を連れて新任地へ赴く途中、荏平じんへいという所の旅館に行き着いた。その旅館には一つの楼があつて、嚴重に扉を封鎖してあるので、彼は宿の主人に子細しさいをたずねると、楼中にはしばしば怪しいことがあるので、多年開かないのであると答えた。それを聞いて、彼はあざ笑つた。

「それではおれをあの楼に泊めてくれ」

「お泊まりになりますか」

「なんの怖いことがあるものか。おれの威名を聞けば、大抵の化け物は向うから退却してしまうに決まっているのだ」

それでも主人は万一を気づかかってさえぎつた。彼の妻子らもし

きりに諫めた。しかも強情我慢の彼はどうしても肯きかないのである。

「おまえ達はほかの部屋に寝ろ。おれはどうしてもあの楼ろうに一夜を明かすのだ」

あくまでも強情を張り通して、彼は妻子けんぞく眷族を別室に宿らせ、自分ひとりしよくは劍を握り、燭しよくをたずさえ、楼に登って妖怪のあらわれるのを待っていると、宵のうちには別に何事もなかったが、夜も三さん更こう（午後十一時—午前一時）に至る時、扉をたたいて進み入ったのは、白ひげ鬚ひげを垂たれて紅かんむり冠かんむりをかぶった老人で、朱鑠しゆりやくを仰いでうやうやしく一いち揖ゆうした。

「貴様はなんの化け物だ」と、朱は叱り付けた。

「それがしは妖怪ではござらぬ。このあたりの土地の神でござる。あなたのような貴人がここへお出でになったのは、まさに妖怪どもが殲滅せんめつの時節到来いたしましたものと思われます。それゆえ喜んでお出迎いに罷り出まかでました」

老人はまず自分の身の上を明かした後に、朱にむかつて斯こういうことを頼んだ。

「もう暫くお待ちになると、やがて妖怪があらわれて参ります。その姿が見えましたならば、その剣をぬいて片端からお斬り捨ててください。及ばずながらそれがしも御助力いたします」

「よし、よし、承知した」と、朱は喜んで引き受けた。

「なにぶんお願い申します」

約束を固めて老人は立ち去った。朱は劍を按じて、さあ来いと待ちかまえていると、果たして青い面かおの者、白い面の者、種々の怪しい者がつづいてこの室内に入り込んで来たので、彼は手あたり次第にばたばたと斬り倒した。最後に牙きばの長いくちばしの黒い者があらわれたので、彼はそれをも斬り伏せた。もうあとに続く者はない。これで妖怪を残らず退治したかと思うと、彼は大いなる満足と愉快を感じて、すぐに旅館の主人を呼んだ。

その頃にはもう早い雞とりが啼いていた。主人をはじめ家内の者どもが燭を照らして駈けつけて見ると、床には幾個の死骸が横たわっていた。それをひと目見て、人々はおどろいて叫んだ。

「あなたは大変なことをなされました」

倒れている死骸は、朱の妻や妾や、悴や娘であつた。最後に斬られたのは従僕であつたらしい。かれらは主人の安否を気づかつて、ひそかに様子をうかがいに來たところを、片端から斬り倒されたのであろう。そう判ると、朱は声をあげて嘆いた。

「化け物め。すっかりおれを玩具おもちゃにしやあがつた」

言うかと思うと、彼もそこに倒れたままで息が絶えた。

水鬼の箒

張ちやう鴻こうぎ業ようという人が秦しんわい淮わいへ行つて、潘はんなにがしの家に寄

寓へやしていた。その房へやは河に面したところにあつた。ある夏の夜に、

張が起きて廁かわやへゆくと、夜は三更を過ぎて、世間に人の声は絶えていたが、月は大きく明るいので、張は欄らんかん干によつて暫くその月光を仰いでいると、たちまち水中に声あつて、ひとりの人間のあたまが水の上に浮かみ出た。

「この夜ふけに泳ぐ奴があるのかしら」

不審に思いながら、月あかりに透かしみると、黒いからだの者が水中に立っていた。顔は眼も鼻も無いのつぺらぼうで、頸くびも動かない。さながら木偶でくぼうの坊のようなものである。張はその怪物にむかつて石を投げ付けると、彼はふたたび水の底に沈んでしまった。

事件は単にそれだけのことであつたが、明くる日の午後、ひと

りの男がその河のなかで溺死したという話を聞いて、さては昨夜の怪物は世にいう水鬼すいきであつたことを張は初めてさと覺つた。

水鬼は命めいを索もとめるといふ諺があつて、水に死んだ者のたましいは、その身代りを求めない以上は、いつまでも成じようぶつ仏ぶつできないのである。したがつて、水鬼は誰かを水中に引き込んで、その命いのちを取ろうとするといい伝えられているが、眼まのあたりに、その水鬼の姿を見たのは今が初めてであるので、張も今更のように怖ろしくなつて、それを同宿の人びとに物語ると、そのなかに米あきんどがあつて、自分もかつて水鬼の難に出逢つたことがあると言つた。その話はこうである。

「わたしがまだ若い時のことでした。嘉興かこうの地方へ米を売りに行

つて、薄暗いときに黄泥溝こうでいこうを通ると、なにしろそこは泥ぶかいので、わたしは水牛を雇つて、それに乗つて行くことにしました。そうして、溝の中ほどまで来かかると、泥のなかから一つの黒い手が出て来て、不意にわたしの足を掴んで引き落そうとしました。こんな所では何事が起るかも知れないと思つて、わたしもかねて用心していたので、すぐに足を縮めてしまうと、その黒い手はさらに水牛の足をつかんだので、牛はもう動くことが出来ない。わたしもおどろいて救いを呼ぶと、往来の人びとも加勢に駆けつけて、力をあわせて牛を牽ひいたが、牛の四足は泥のなかへ吸い込まれたようになって、曳ひけども押せども動かない。百計尽きて思いついたのが火牛かぎゆうのはかりごとで、試みに牛の尾に火をつけると、

牛も熱いのに堪えられなくなったと見えて、必死の力をふるって起^たちあがると、ようように泥の中から足を抜くことが出来ました。それから^{あらた}検めてみると、牛の腹の下には古い箒^{ほうき}のようなものがしつかりと^{から}搦みついていて、なかなか取れませんでした。それがまた、非常になまぐさいような臭い^{にお}がして寄り付かれませんでした。大勢が杖をもつて撃ち叩くと、幽鬼のむせび泣くような声がして、しただたる水はみな黒い血のしずくでした。大勢はさらに刃物でそれを^やずたずたに切つて、柴の火へ投げ込んで焚いてしまいましたが、その忌^{いや}な臭いはひと月ほども消えなかつたそうです。しかしそれから後は、黄泥溝で溺れ死ぬ者はなくなりました」

僵尸きょうし（屍体）を画く

杭州の劉りゅういけん以賢は肖像画を善くするを以つて有名の画工であつた。その隣りに親ひとり子ひとりの家があつて、その父が今度病死したので、せがれは棺を買いに出る時、又その隣りの家に声をかけて行つた。

「となりの劉先生は肖像画の名人ですから、今のうちに私の父の顔を写して置いてもらいたいと思います。あなたから頼んでくれませんか」

隣りの人はそれを劉に取次いだので、劉は早速に道具をたずさえて行くと、悴はまだ帰つて来ないらしく、家のなかには人の影

もみえなかつた。しかし近所に住んでいて、その家の勝手もよく知っているので、劉は構わずに二階へあがると、寢床の上には父の死骸が横たわっていた。劉はそこにある腰掛けに腰をおろして、すぐに画筆を執りはじめると、その死骸は忽ちたちま起きあがった。劉ははつと思うと同時に、それが走屍そうしというものであることを直ぐにさと覚つた。

走屍は人を追うと伝えられている。自分が逃げれば、死骸もまた追つて来るに相違ない。いつそじつとしていて、早く画をかいてしまう方がいいと覚悟をきめて、劉は身動きもしないで相手の顔を見つめると、死骸も動かずに劉を見つめている。

その人相をよく見とどけて、劉は紙をひろげて筆を動かし始め

ると、死骸もおなじように臂ひじを動かし、指を働かせている。劉は一生懸命に筆を動かしながら、時どきに大きい声で人を呼んだが、誰も返事をする者が無い。鬼気はいよいよ人に逼せまつて、劉の筆のさきも顫ふるえて来た。

そのうちに悴の帰つて来たらしい足音がきこえたので、やれ嬉しやと思つてしていると、果たして悴は二階へあがつて来たが、父の死骸がこの体ていであるのを見て、あつと叫んで仆たおれてしまった。その声を聞きつけて、隣りの人は二階からのぞいたが、これも驚いて梯子からころげ落ちた。

こういう始末であるから、劉はますます窮した。それでも逃げることは出来ない。逃げれば追いかけて来て掴み付かれる虞おそれが

あるので、我慢に我慢して描きつづけていると、そこへ棺桶屋が棺を運び込んで来たので、劉はすぐに声をかけた。

「早く箒を持って来てくれ。箒ほうきぐさ草の箒を……」

棺桶屋はさすがに商売で、走屍などにはさのみ驚かない。走屍を撃ち倒すには箒草の箒を用いることをかねて心得ているので、劉のいうがままに箒を持って来て、かの死骸を撃ち払うと、死骸は元のごとく倒れた。気絶した者には生姜湯しょうがゆを飲ませて介抱し、死骸は早々に棺に納めた。

美少年の死

京城の金魚街に徐四じよしという男があつた。家が甚だ貧しいので、兄夫婦と同居していた。ある冬の夜に、兄は所用あつて外出し、今夜は戻らないという。兄嫁は賢さかしい女であるので、夫の出たあとで徐四に言った。

「今夜は北風が寒いから、煖坑だんこう（床下に火を焚いて、その上に寝るのである）でなければ、とても寝られますまい。しかしこの家にはたった一つの煖坑しかないのですから、夫の留守にあなたと一つ床に枕をならべて寝るわけには行きません。わたしは母の家へ帰つて寝かしてもらうことにしますから、あなた一人でお寝やすみなさい」

義弟は承知して出してやった。表には寒い風が吹きまくつて、

月のひかりが薄あかるい。その夜も二更にこうとおぼしき頃に、門をたいたいて駈け込んで来た者がある。それは一個の美少年で、手に一つの囊ふくろをさげていた。徐四が怪しんで問うまでもなく、少年は泣いて頼んだ。

「どうぞ救ってください。わたしは実は男ではありません。後ごしよ生うですから、なんにも聞かずに今夜だけ泊めてください。そのお礼にはこれを差し上げます」

少年はふくろを解いて、見ごとな毛けごろも裘せうをとり出した。それは貂てんの皮で作られたもので、金や珠の頸かざりが燦然さんぜんとして輝いているのを見れば、捨て売りにしても価い万金という代物しろものである。徐四もまだ年が若い。相手が美しい女で、しかも高価の宝を

いだいているのを見て、こころすこぶ頗る動いたが、かんがえてみるとどうも唯者でない。迂闊に泊めてやつて、どんな禍いを招くようなことになるかも知れない。さりとして情すげなく断わるにも忍びないので、かれは咄嗟の思案でこう答えた。

「では、まあともかくも休んでおいでなさい。となりへ行つてちよつと相談して来ますから」

女を煖坑の上に坐らせて、徐四はすぐに表へ出て行つたが、となりの人に相談したところで仕様がなと思つたので、かれは近所の善覚ぜんかくじ寺という寺へかけ付けて、方丈ほうじょうの円智えんちという僧をよび起して相談することにした。円智はここらでも有名の高僧で、徐四も平素から尊敬しているのであった。

その話を聴いて、円智も眉をひそめた。

「それはおそらく高位顯官の家のむすめか妾で、なにかの子細あつて家出したものであろう。それをみだりに留めて置いては、なにかの連まぎぞえ坐を受けないとも限らない。さりとして追いつくのも氣の毒であると思うならば、おまえは今夜この寺に泊まつて家へ戻らぬ方がよい。万一の場合には、わたしの留守の間に入り込んで来たのだといえ、申し訳は立つ。夜が明けければ、女はどこへか立ち去るに相違ないから、その時刻を見計らつて帰ることにしなさい」

なるほどと徐四もうなずいて、その夜を善覚寺で明かすことにした。それで済めば無事であつたが、外宿した徐四の兄は夜ふけ

の寒さに堪えかねて、わが家へ毛皮きものの衣を取りに帰ると、寢床の煖坑の下には男の沓くつがぬいである。見れば、男と女とが一つ衾よぎに眠っている。さてはおれの留守の間に、妻と弟めが不義をはたらいたかと、彼は烈火の怒りに前後をかえりみず、腰に帯びている劍をぬいて、枕をならべている男と女の首をばたばたと斬り落した。

言うまでもなく、それは兄の思いちがいで、女はかの美少年であつた。男は善覚寺の若にやくそう僧であつた。

高僧の弟子にも破戒のやからがあつて、かの若僧は徐四の話を洩れ聴いて不埒の料簡を起したらしく、そつと寺ちゆうをぬけ出して徐四の留守宅へ忍び込んだのである。それから先はどうした

のか、勿論わからない。

あやまって二人を殺したことを発見して、兄はすぐに自首して出た。しかし右の事情であるから、誤殺であることは明白である。美少年と若僧とは不義姦通である。殺したものに悪意なくして、殺された者どもは不義のやからであるといふので、兄は無事に釈放された。

ここに判らないのは、美少年に扮していたかの女の身の上である。官でその首を市いちにかけて、心あたりの者を求めたが、誰も名乗って出る者はなかった。

「可哀そうに、あの女はこの家へ死にに来たようなものだ」

徐四は形見かたみの毛裘や頸飾りを売って、その金を善覚寺に納め、

永く彼女の菩提を弔つた。

秦の毛人

湖広に房山ぼうざんという高い山がある。山は甚だ嶮峻で、四面にたくさんの洞窟があつて、それがあたかも房へやのような形をなしているので、房山と呼ばれることになつたのである。

その山には毛人もうじんという者が棲んでいる。身のたけ一丈余で、全身が毛につつまれているので、人呼んで毛人というのである。

この毛人らは洞窟のうちに棲んでいるらしいが、時どきに里へ降りて来て、人家の雞や犬などを捕り啖くらうことがある。迂闊にそれ

をさえぎろうとすると、かれらはなかなかの大力で、大抵の人間は投げ出されたり、撲り付けられたりするるので、手の着けようがない。弓や鉄砲で撃つても、矢玉はみな跳ねかえされて地に落ちてしまうのである。

しかも昔からの言い伝えで、毛人を追い攘うには一つの方法がある。それは手を拍つて、大きな声で囃し立てるのである。

「長城を築く、長城を築く」

その声を聞くと、かれらは狼狽して山奥へ逃げ込むという。

新しく来た役人などは、最初はそれを信じないが、その実際を見るに及んで、初めて成程と合点するそうである。

長城を築く——毛人らが何故それを恐れるかという、かれら

はその昔、秦の始皇帝が万里の長城を築いたときに駆り出された役夫である。かれらはその工事の苦役に堪えかねて、同盟脱走してこの山中に逃げ籠ったが、歳久しゆうして死なず、遂にかか
る怪物となつたのであつて、かれらは今に至るも築城工事に駆り
出されることを深く恐れているらしく、人に逢えば長城はもう出
来あがつてしまったかと訊く。その弱味に付け込んで、さあ長城
を築くぞと囁し立てると、かれらはびっくり敗亡して、たちまち
に姿を隠すのであると伝えられている。

秦代の法令がいかに厳酷であつたかは、これで想いやられる。

帰安の魚怪

明代みんのことである。帰安きあん県の知県ちけんにながしが赴任してから半年ほどの後、ある夜その妻と同寝していると、夜ふけてその門を叩く者があつた。知県はみずから起きて出たが、暫くして帰つて来た。

「いや、人が来たのではない。風が門を揺すつたのであつた」
そう言つて彼は再び寢床に就いた。妻も別に疑わなかつた。その後、帰安の一県は大いに治まつて、獄を断じ、訴えうったを捌くさばこと、あたかも神しんのごとくであるといつて、県民はしきりに知県の功績を賞讃した。

それからまた数年の後である。有名の道士張ちようてんし天師が帰安県を

通過したが、知県はあえて出迎えをしなかつた。

「この県には妖気がある」と、張天師は眉をひそめた。そうして、知県の妻を呼んで聞きただした。

「お前は今から数年前の何月何日の夜に、門を叩かれたことを覚えてるか」

「おぼえて居ります」

「現在の夫はまことおっとの夫ではない。年を経たる黒魚こくぎよ（鱧はもの種類）の精である。おまえの夫はかの夜すでに黒魚のために食われてしまったのであるぞ」

妻は大いにおどろいて、なにとぞ夫のために仇を報いてくださいれと、天師にすがって嘆いた。張天師は壇に登って法をおこなう

と、果たして長さ数丈ともいうべき大きい黒魚が、正体をあらわして壇の前にひれ伏した。

「なんじの罪は斬ざんに当る」と、天師はおごそかに言い渡した。

「しかし知県に化けているあいだにすこぶる善政をおこなっているから、特になんじの死をゆるしてやるぞ」

天師は大きい甕かめのなかにかの魚を押し籠めて、神符をもってその口を封じ、県衙けんがの土中に埋めてしまった。

そのときに、魚は甕のなかからしきりに哀れみを乞うと、天師はまた言い渡した。

「今は赦ゆるされぬ。おれが再びここを通るときに放してやる」

張天師はその後ふたたび帰安県を通らなかつた。

狗熊

清しんの乾けんりゆう隆りゆう二十六年のことである。虎こきゆう邨ゆうに乞食があつて一頭の狗熊くゆうを養つていた。熊の大きさは川馬せんばのごとくで、箭やのような毛が森立している。

この熊の不思議は、物をいうことこそ出来ないが、筆を執つて能く字をかき、よく詩を作るのである。往來の人が一錢をあたえれば、飼いぬしの乞食がその熊を見せてくれる。さらに百錢をあたえて白紙をわたせば、飼い主は彼に命じて唐詩一首を書かせてくれる。まことに不思議の芸であつた。

ある日、飼い主が外出して、^{けもの}獣だけ独り残っているところへ、ある人が行って例のごとくに一枚の紙をあたえると、熊は詩を書かないで、思いも寄らないことを書いた。

自分は長沙^{ちやうさ}の人で、姓は金^{きん}、名は汝利^{じより}というものである。若いときにこの乞食に拐^{かどわか}引されて、まず唾になる薬を飲まされたので、物をいうことが出来なくなった。その家には一頭の狗熊が飼ってあって、自分を赤裸にしてそれと一緒に生活させ、それから細い針を用いて自分の全身を隙間なく突き刺して、熱血淋漓たる時、一方の狗熊を殺してその生^{なまか}皮を剥ぎ、すぐに自分の肌の上を包んだので、人の生き血と熊の生き血とが一つに粘^{ねば}り着いて、皮は再び剥がれることなく、自分はそのままの狗熊になってしま

つた。それを鉄の鎖につないで、こうして芸を売らせているので、こんにち今日までにすでに幾万貫の銭を儲けたであろう。何をいうにも口を利くことが出来ないので、おめおめと彼に引き廻されているのである。

これを書き終つて、熊はわが口を指さして、血の涙を雨のごとくに流した。

観るひと大いにおどろいて、その書いたものを証拠に訴え出ると、飼い主の乞食はすぐに捕われて、すべてその通りであると白状したので、かれは立ちどころに杖殺され、狗熊の金汝利は長沙の故郷へ送り還された。

人魚

著者の甥の致華ちかという者が淮南わいなんの分司となつて、四川しせんの※州きしゆう城を過ぎると、往来の人びとが何か氣ちがいのように騒ぎ立っている。その子細しさいをきくと、或る村民の妻徐氏じよしというのは平生から非常に夫婦仲がよかつたが、昨夜も夫とおなじ床に眠つて、けさ早く起きると、彼女のすがたは著るしく變つていた。

徐氏の顔や髪や肌の色はすべて元のごとくであるが、その下半身がいつか魚に變つてしまつたのである。乳うろこから下には鱗うろこが生えてなめらかなになまぐさく、普通の魚と同様であるので、夫もただ驚くばかりで、どうする術すべも知らなかつた。妻は泣いて語つた。

「ゆうべ寝る時分には別に何事もなく、ただ下半身がむず痒い^{かゆ}ので、それを搔くとからだの皮が次第に逆立つて来たようですから、おそらく痺癬^{ひぜん}でも出来たのだろうかと思つていました。すると、^{ごこう}五更ののちから両脚が自然に食つ付いてしまつて、もう伸ばすことも縮めることも出来なくなりました。撫でてみると、いつの間にか魚の尾になつて居るのです。まあ、どうしたらいいでしょう」

夫婦はただ抱き合つて泣くばかりであるという。

致華はその話を聞いて、試みに供の者を走らせて実否^{じつぷ}を見とどけさせると、果たしてそれは事実であると判つた。但し致華は官用の旅程を急ぐ身の上で、そのまま出発してしまつたために、人魚ともいふべき徐氏をどう処分したか、彼女を魚として河へ放す

ことにしたか、あるいは人として家に養って置くことにしたか、それらの結末を知ることが出来なかつたそうである。

金鉞の妖霊

乾※子かんきしというのは、人ではない。人の死骸けの化したるもの、すなわち前に書いた僵尸きょうしのたぐいである。雲南地方には金鉞が多いい。その鉞穴に入った坑夫のうちには、土に圧されて生き埋めになつて、あるいは数十年、あるいは百年、土氣と金氣に養われて、形骸はそのままになつている者がある。それを乾※子と呼んで、普通にはそれを死なない者にしているが、実は死んでいたのであ

る。

死んでいるのか、生きているのか、甚だあいまいな乾※子なるものは、時どきに土のなかから出てあるくと言ひ伝えられている。鉢内は夜のごとくに暗いので、穴に入る坑夫は額のひたい上にともしびをつけて行くと、その光りを見てかの乾※子の寄つて来ることがある。かれらは人を見ると非常に喜んで、烟草たばこをくれという。烟草をあたえると、立ちどころに喫つてしまつて、さらに人にむかつて一緒に連れ出してくれと頼むのである。その時に坑夫はこう答える。

「われわれがここへ来たのは金銀を求めためであるから、このまま手をむなしゆうして帰るわけにはゆかない。おまえは金の蔓つる

のある所を知っているか」

かれらは承知して坑夫を案内すると、果たしてそこには大いなる金銀を見いだすことが出来るのである。そこで帰るときには、こう言つてかれらを瞞すのを例としている。

「われわれが先ず上がつて、それからお前を籃かごにのせて吊りあげてやる」

竹籃にかれらを入れて、繩をつけて中途まで吊りあげ、不意にその繩を切り放すと、かれらは土の底に墜ちて死ぬのである。あの情けぶかい男があつて、瞞すだまのも不憫だと思つて、その七、八人を穴の上まで正直に吊りあげてやると、かれらは外の風にあたるや否や、そのからだも着物も見る見る融とけて水となつた。その

臭いは鼻を衝くばかりで、それを嗅いだ者はみな疫病にかかつて死んだ。

それに懲りて、かれらを入れた籃は必ず途中で縄を切つて落すことになつてゐる。最初から連れて行かないといへば、いつまでも付きまといつて離れないので、いつもこうして瞞すのである。但しこちらが大勢で、相手が少ないときには、押えつけ縛りあげて土壁に倚よりかからせ、四方から土をかけて塗り固めて、その上に燈台を置けば、ふたたび祟りをなさないと言い伝えられている。

それと反対に、こちらが小人数で、相手が多数のときは、死ぬまでも絡み付いていられるので、よんどころなく前にいったような方法を取るのである。

海和尚、山和尚

潘^{はん}なにがしは漁業に老熟しているので、常にその獲物^{えもの}が多かつた。ある日、同業者と共に海浜へ出て網を入れると、その重いことと平常に倍し、数人の力をあわせて纒^{わす}かに引き上げることが出来た。見ると、網のなかに一尾の魚もない。ただ六、七人の小さい人間が坐っていて、漁師らをみて合掌頂^{ちようらい}礼^{らい}のさまをなした。かれらの全身は毛に蔽われてさながら猿のごとく、その頭の天辺だけは禿^はげたようになって一本の毛も見えなかった。何か言うようでもあるが、その語音^{ごいん}はもとより判らない。

とにかくに異形いぎようの物であるので、漁師らも網を開いて放してやると、かれらは海の上をゆくこと数十歩にして、やがて浪の底に沈んでしまった。土人の或る者の説によると、それは海和尚かいおしょうと呼ぶもので、その肉を乾して食らえば一年間は飢えないそうである。

また、別に山和尚さんおしょうというものがある。

李姓りせいのなにがしという男が中州に旅行している時、その土地に大水が出たので、近所の山へ登って避難することになったが、水はいよいよ漲みなぎって来たので、その人はよんどころなく更に高い山頂に逃げのぼると、そこに小さい草の家が見いだされた。それは山に住む農民が耕地を見まわりの時に寝泊まりするところで、家

の内には草を敷いてある。やがて日も暮れかかるので、彼はそのあき家にはいつて一夜を明かすことにした。

その夜半である。

大水をわたって来る者があるらしいので、李はそつと表をうかがうと、ひとりの真つ黒な、脚のみじかい和尚が水面を浮かんで近寄つて来る。それが怪物らしいので、彼は大きい声をあげて人を呼ぶと、黒い和尚も一旦はやや退いたが、やがてまた進んで来るので、彼も今は途方にくれて、一方には人の救いを呼びつづけながら、一方にはそこにある竹杖をとつて無暗に叩き立てているところへ、他の人びともあつまつて来た。

大勢の人かげを見て、怪物はどこへか立ち去ってしまったて、夜

のあけるまで再び襲つて来なかつた。水が引いてから土地の人の話を聞くと、それは山和尚というもので、人が孤独でいるのを襲つて、その脳を食らうのであると。

火箭

乾隆六年、嘉興かこうの知府を勤める楊景震ようけいしんが罪をえて軍台てきじに謫てきじ成ゆの身となつた。彼は古北の城楼に登ると、楼上に一つのあかがねの匣はこがあつて、嚴重に封鎖してある。伝うるところによれば、明代みんの総兵戚繼光せきけいこうの残して置いたもので、ここへ来た者がみだりに開いて看みてはならないというのである。

楊はしばらくその匣を撫でまわしていたが、やがて匣の上に震しんの卦けが金字で彫つてあるのを見いだして、彼は笑つた。

「卦は震で、おれの名の震に応じている。これはおれが開くべきものだ」

遂にその匣の蓋をひらくと、たちまちにひと筋の火箭ひやが飛び出して、むこう側の景德廟の正殿の柱に立った。それから火を発して、殿宇も僧房もほとんど焼け尽くした。

九尾蛇

茅ぼうはち八という者が若いときに紙を売つて江西に入った。その土

地の深山に紙ししよう廠が多かつた。廠にいる人たちは、日が落ちかかると戸を閉じて外へ出ない。

「山の中には怖ろしい物が棲んでいる。虎や狼ばかりでない」

茅もそこに泊まっているうちに、ある夜の月がひどく冴え渡つた。茅は眠ることが出来ないので、戸をあけて月を眺めたいと思つたが、おどされているので、再三躊躇した。しかも武勇をたのんで、思い切つて出た。

行くこと数十歩ならず、たちまち数十さるの猴の群れが悲鳴をあげながら逃げて来て、大樹をえらんで攀よじのぼつたので、茅もほかの樹にのぼつて遠くうかがっていると、一匹の蛇が林の中から出て来た。蛇は太い柱のごとく、両眼は灼しやくしやく々とかがやいている。

からだの甲こうは魚鱗の如くにして硬く、腰から下に九つの尾が生えていて、それを曳いてゆく音は鉄よろいの甲よろいのように響いた。

蛇は大樹の下に來ると、九つの尾を逆さかしまにしてくるくと舞った。尾の端はしには小さい穴がある。その穴から涎よだれがはじくようにほとばしって、樹の上の猴を撃った。撃たれた猴は叫んで地に落ちると、その腹は裂けていた。蛇はしずかにその三匹を食らって、尾を曳いて去った。

茅おそは懼れて帰った。その以来、彼も暗くなると表へ出なかつた。

青空文庫情報

底本：「中国怪奇小説集」光文社文庫、光文社

1994（平成6）年4月20日初版1刷発行

※校正には、1999（平成11）年11月5日3刷を使用しました。

入力：tatsuki

校正：小林繁雄

2003年7月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

中国怪奇小説集

子不語

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 岡本綺堂
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>